

# 英文多読による個別自律学習の指導とその評価

(豊田工業高等専門学校) 吉岡 貴芳, 西澤 一, 伊藤和晃

## 1.はじめに

亀井らの調査<sup>1)</sup>によれば, 高専卒業者の英語力の弱さが彼らの卒業後の進路である企業や大学から指摘されており, 昨今の国際的に通用する技術者育成の必要性から, 英語力向上のために早急な教育改善が必要, としている。

筆者らはこの状況を改善するために, インプットを重視したリスニング量の確保のための音読筆写演習<sup>2)</sup>やリーディング力向上のために多量に英文を読む多読を専門科目の授業に取り入れ実践してきた<sup>3)</sup>。

本報では, 多読による自律学習の指導を本格的に導入してから1年半が経過し, その運用方法や学習効果が少しずつ明確になってきたので, 当研究の一通過点として報告をする。

## 2. 多読による個別自律学習の指導

本校の創立時(1968年卒業)から2002年度卒業の卒業生に対して行った教育評価アンケートの結果(無作為抽出した3000名のうちから得られた有効回答数690名分)から, 本校の英語教育は教育目標の達成度, 教育内容・方法ともに卒業生の評価が最も低かった<sup>4)</sup>。また, 多くの卒業生が英語の表現能力を見につけられないことを不満としていることがわかった。なお, 客観的証拠が示せるようなアンケートをとっている訳ではないが, 「専門科目を落とすと進級が危なくなるが, 英語は落としても影響は少ない」と考える等, 英語学習を軽視する傾向が日頃より接している学生からうかがえる。また先ほどの亀井らの調査によれば, 高専における英語授業の単位数は, 必修とされる単位数だけを見ると, 1, 2年生では5単位から6単位あるものの, 3年生では

4単位を切り, 5年生にいたっては必修科目にもなっていないという高専がかなりある<sup>1)</sup>。また, 高学年における英語は選択科目として扱っている高専が多いが, 必修と選択を合わせた時間数でも3単位ほどであり, これらの数字は, 高等学校(普通科)の3年間で約18単位, 大学(一般教養)でおおむね6~8単位が必修とされていることに対しかなり少ないと言わざるを得ない, としている<sup>1)</sup>。

杉山等は, 英語運用能力の基礎であるリスニング能力向上に必要なボトムアップ処理の自動化には, インプットの絶対量を増やす必要があるとして, 大学生を対象としたディクテーション指導を行い, その学習効果があることを報告している<sup>5)</sup>。Hiraiは, リスニング能力とリーディング能力, cloze testで測定した言語能力との間に高い相関があることを報告している<sup>6)</sup>。Krashenは, 読み書きの能力向上には大量に読むことが最も有効であるとし, 学習者が読みたいと思う軽い読み物を大量に準備することを提唱している<sup>7)</sup>。

このように, 言語能力, リスニング能力, リーディング能力が互いに高い相関を持ち, 能力の向上にはインプット量の増加が必要であることが報告されていることから, 筆者らは平成14年度後学期よりリーディング力の向上を目的として, 専門科目において英文多読授業による英文インプット量の増加を試みてきた<sup>3)</sup>。多読の方式はさまざまあるが, 筆者らは, 電気通信大学の酒井邦秀助教授およびSSS英語学習法研究会<sup>8)</sup>のSSS英語学習法<sup>9)</sup>(SSS; Start with Simple Stories, または100万語多読)を採用した。この方式は, Graded Readersとよばれる単語や文法のレベルを制限し段階的に難易度をかえて作られた本を用い, やさしいレベルの本からだんだんとレベルをあげながら和訳しないで読んでいくと

いったもので、「多読3原則」を掲げている<sup>9)</sup>。

### 3. 授業における多読指導

平成14年度後学期に続き、平成15年度前学期および後学期の専門科目「電気技術英語 A,B」において、英文多読の授業を実践した。前学期は90分の授業のうち前半60分を専門単語学習およびディクテーション演習の時間に、後半30分を多読に割り当てた。後学期は前半30分をディクテーション演習、残りの60分を多読に割り当てた。前述の多読3原則を元に次のように運用した。多読用の本は個々の学生が辞書を用いずにある程度の速さで読める自分のレベルに合った本を学生自身に選ばせた。また心理的な障壁のないように、知りたい、面白いといった以外のつまらないと思う本はすぐに読むのをやめるよう指導した。これはつまらない本をいつまでも読んでいると、本を読むことそのものがつまらないと感じ、結局読書量が低下してしまいかねないからである。本の種類としては、学生の多種多様な要求に答えられるよう物語、ノンフィクション、サイエンス、伝記、ミステリーなど様々な Graded Readers を約600冊準備した。

教員は授業中の読書の様子や読書記録の履歴をモニターし、学生に対して現在のレベルが読めているかどうか確認し、無理してレベルを上げるよりも、自分が楽に読める程度のレベルを大量に読んで、日本語に訳さずにすらすらと読めることを目標にするよう指導した。ここですらすらとは、酒井の著書によれば「1分間に100語以上ならばOK, 70語以下ならばやさしいレベルの本に替える」としている<sup>9)</sup>。

本報では平成15年度後学期の授業をもとにその学習効果の評価を行った。

### 4. 評価

多読によるリーディング力の向上を評価するための外部指標として、ACE (Assessment of Communicative English) テスト<sup>10)</sup>を用いた。ACE

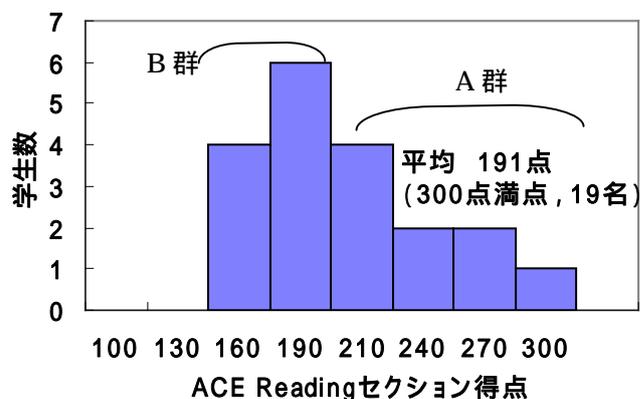


図1 フレテスト ACE Reading セクション得点分布 (平成15年度5年生)

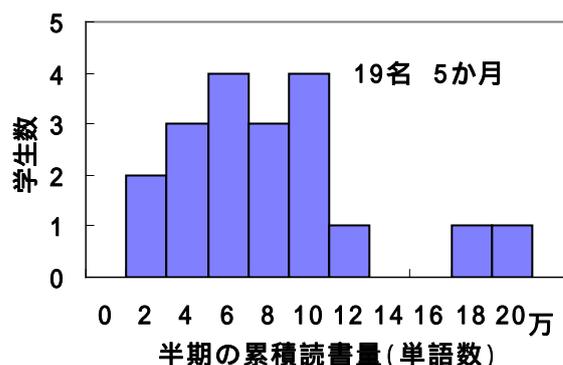


図2 累積読書量分布 (平成15年度後学期)

テストは、Vocabulary/Grammar, Reading, Listening の3つのセクションにより構成されている。出題形式はTOEICと同様であるが英文の内容はTOEICのようなビジネスを対象としたものではなく学生の実生活や学校活動に関するものがほとんどであり、教育課程を配慮した語彙・文法コントロールがなされている。さらに、Readingセクションは短時間で多量の英文を読んで大意や必要な情報を把握する技能をはかるものとしているため、筆者らはReadingセクションの結果によって今回の多読によるリーディング力の向上を評価することができるのではないかと考えた。また、酒井によればリーディング力向上のためには100万語単位で英文を読むことが必要であるとのことから<sup>8)</sup>、読書量(単語数)を評価の指標として採用した。本校教育改善の内部資料によれば、1年生から3年生までの精読による英語授業で接する単語数は約6.8万語である<sup>2)</sup>ことから考えれば、(精読と多読とで方法は異なるが)

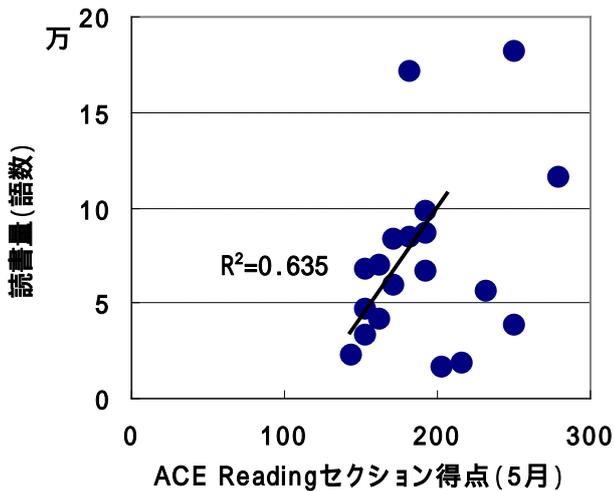


図 3 当初のリーディング力と読書量の関係

100 万語のインプットはこの 10 倍以上あり、十分多いものといえる。

図 1 に、プレテストとして平成 15 年 5 月に実施した ACE Reading セクションの得点分布（平成 15 年度 5 年生）を示す。図 1 からは、平均点以上の 9 名と平均点未満の 10 名の 2 群に分かれている。ここで前者を A 群、後者を B 群として、以下に効果を分析する。なお、被験者が 19 名と少ないが、現時点では教育の途中でもあり、分析結果を研究としては経過的な参考データとして扱うものとする。

図 2 に平成 15 年度後学期に行った多読の授業での学生の読書量分布を示す。最も多く読んだ者で約 18 万語、あまり読まなかった者で 1 万語程度となった。約 18 万語読んだ者は図 1 中の A 群に属する学生であったが、B 群に属する学生のうちの一人が約 17 万語読んでいる。しかし、前述のとおり酒井は 100 万語単位で読むことで、リーディング力の向上が期待できると言っているのに対し、学生の読書量は多い者でも 20 万語に達しておらず、十分な多読ができたとは言いがたい。半年間で 100 万語を読むためには、授業以外の課外でも読書量を確保することが必要であるが、ノルマとして学生に課してしまっただけでは、Krashen の言う FVR (Free Voluntary Reading) 環境を整え<sup>7)</sup>、楽しむための読書<sup>9)</sup>を学生ができるはずがない。授業の運用方法を考慮しても、半年間での学習効果の評価はしがたい。ただ、それで議論を終えてしまっただけでは不毛である。ここでは、

学生が十分な学習をしているとは言いがたいが、英語そのものに数多く触れさせることの重要性が指摘されていることもあり、この教育・研究を継続するためにも有用なデータを分析してみたい。

当初のリーディング力を表すと考えたプレテストでの ACE Reading セクションの得点と読書量との相関関係を図 3 に示す。図 3 より、リーディング力が当初からある程度ある学生ならば、比較的多くの読書量を確保できるという仮定に反して、図 1 の A 群の学生でも 5 万語未満の読書量しかない者や、前述のとおり B 群でも約 17 万語を読む者がいた。これは読書量が当初の実力だけでなく、授業への取り組み姿勢にも影響するのだと考えられる。半期の授業で B 群に属するほとんどの学生の読書量は、1 ~ 10 万語程度で相関がある ( $R^2=0.635$ ) ことがわかる。

多読授業終了後、翌年の 2 月に再度 ACE をポストテストとして速やかに実施した。多読による学習後でも伸び率がマイナス 20% 程度の学生が 3 名、かなり値が外れているためグラフから省いたが 40% 程度得点が減少した学生も 1 名いた (図 4)。

つぎに読書量が 15 万を超えた学生 2 名について述べる。この 2 名はそれぞれ図 1 の A 群と B 群それぞれ別に属する、すなわち当初の実力が高い学生と比較的低いと学生でも、読書量がほぼ同じであったことは今後の多読活動を継続させる上で興味深い結果である。このため、わずか 2 名ではあるが彼らの読書内容について詳細について分析を試みる。A 群

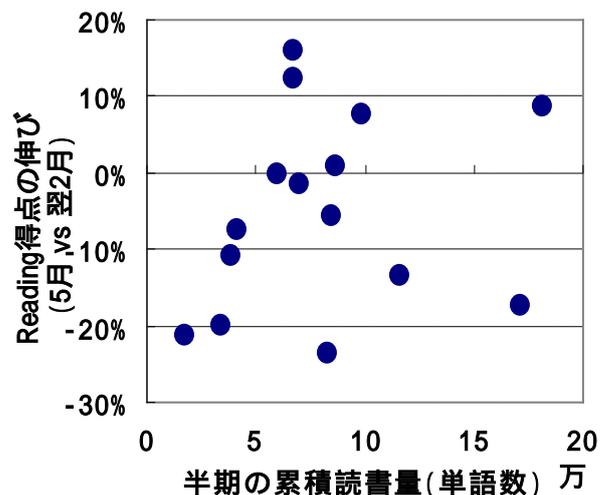


図 4 累積読書量と Reading 得点の伸びの関係

に属したこの学生は、主にレベルの高い本(Penguin Readers Level2 程度)を読んでいた一方で、B群に属していたこの学生は、主にレベルの比較的低い本(Penguin Readers Easy Starts 程度)を読んでいた。一般的に一冊の本の単語数はレベルが高いほど多いが、この2名が同程度の量を読んでいたということは、このB群の学生はこのA群の学生より多くの冊数の本を読んでいたことになる。実際、彼らの読書記録によれば、このA群の学生の読書冊数は32冊であるのに対し、このB群の学生の読書冊数は192冊であった。この理由として、2名の授業以外での読書量が約3割となっていることがあげられる。比較的英語の実力が低いB群の学生達が本を多く読むためには、易しい本を多く読むことができたB群に属するこの学生の読書履歴や読書態度を分析することは価値があることを示している。

## 5. まとめ

多量の英文を読んでリーディング力の向上をはかる目的で、授業において多読を実践してきた。当初筆者らは、学習者が授業外でも読書を継続し平均20万語程度の多読をするのではないかと期待していたが、一部の学生を除いてほとんど読書活動はなされず、結果として読書量(単語数)とACE Reading セクション得点の伸びとの関係にはばらつきが大きい結果となった。

## 6. 今後の課題

今後、授業中以外の課外も含めて、どのようにして読書量を増やしていくかがこの教育方法を成功させるためのポイントとなる。100万語を到達させるためには何か月必要かなどの定量評価も必要である。また、効果的な学習には学習への動機付けが重要であるとの報告もあり<sup>11)</sup>、その動機付けとなる対象の調査や、多量の読書を成した他者の学習履歴を分析し、学生が継続的に読み進めるための指針として提示するといった指導方法を検討していくことが課題

である。平成16年度に本校では図書館に新たに約2000冊のGraded Readersを購入し、筆者らが所属する学科の本学科2年生から専攻科2年生までの電気英語系専門科目延べ8科目において、多読を実践している。また、試験的ではあるが同学科第1学年の学生に対して一般科目担当の指導教員と専門学科の教員とが連携して朝読書を平成16年5月から実施し始めた。今後、本活動を継続していき、方法を改善していきながら結果報告をしていきたい。

## 参考文献

- 1) 亀山他, 高等専門学校における英語教育の現状と課題, 科研費基盤研究(C)(1)(13898006), (2001).
- 2) 西澤他, 継続的な自習支援による英語運用能力向上の試み, 高専教育第26号, pp.97-102, (2003).
- 3) 吉岡他, 英文多読による個別自律学習の指導, H15年度高専教育講演論文集, pp.65-68, (2003).
- 4) 西澤他, 卒業生アンケートによる教育評価と教育改善への活用, 高専教育第27号, pp.555-560 (2004).
- 5) 杉浦他, リスニング能力養成のための自律学習: ディクテーションの効果, 名古屋大学/言語文化論集 第23号, pp.105-121 (2002).
- 6) Hirai, A, The relationship between listening and reading rates of Japanese EFL learners, The Language Journal 83 (3), pp.367-384 (1999).
- 7) Krashen, Stephen D, The Power of Reading, Libraries Unlimited (1993).
- 8) 英語学習研究会 SSS, <http://www.seg.co.jp/sss/> (平成16年4月1日より, 日本多読学会を設立)
- 9) 酒井邦秀 快読100万語!ペーパーバックへの道, ちくま学芸文庫, (2002).
- 10) 桐原書店, B.A.C.E / A.C.E., <http://kiri-hara-kyoiku.net/BACE-ACE/>
- 11) たとえば, 戸谷他, 英語によるコミュニケーション能力向上を目指した工学教育の実践, 高専教育第27号, pp441-446, (2004).